

れました。

昭和三十年改訂された「宗教学精要」の序に「衰眼の私を助けて本書の撰作に大なる協力を惜しまれなかつた、望月真君に御礼を述べて置く」とのお言葉を賜りました。吾師懷慕の情は尽きることなく、後日また、師恩報謝と斯道宣揚のため執筆の機縁をいただきたく切に念じて止みません。

## 加藤先生の学恩を偲んで

愛宕神社宮司 鎌田太一

加藤玄智博士が昭和四十五年八月に亡くなられ、その没後十年の記念講演会を國學院大學の講堂で催されてからも十年を経過した。寔に月日の経つことの早さを今更乍ら痛感して止まない。

昭和二十五年の秋、時の乃木神社高山宮司様のお伴を

して暗くなった御殿場の駅に降りて東山の学労窟迄小一里の間、真暗な路を期待と不安の気持で参上し、一夜親しく神道についてお話を承った温顔を忘れることが出来ない。

其の後、加藤先生が、乃木神社信仰要説「吾が行く神の道」を著作されるについて、先生の口述筆記のお手伝いを見せて頂き、続いて明治神宮の手によって「神道書籍目録」の統編が刊行されることとなつて、当時の文化課主任権禰宜原口さんと共に、当時明治神宮権宮司伊達先生のお伴で屢々参上し、熱意をこめてお教え頂いたことは有難いの一言につきる。先生の学問(神道)に対する真摯な態度、経済的に大変御不自由な中を杉浦千代様が全く献身的に御世話され、お伺いする度に乏しい中から精一杯の御馳走をして頂いた真心も忘れることが出来ない。

先生が学者として最後迄立派な学績を残され、大往生を挙げられた一半は、杉浦様に負う所が多かつたと、その功績を称えたい。

先生没後、茫々二十年、今でも学旁窟に於ける先生の温顔、神道を語る時の熱誠溢るる声調、周辺の景など只懐しく、そして先生の高邁な御精神を忘れることなく、神道を奉ずるものの一員として、生きの限り努力を重ねたいと、遙か秋田の田舎より、先生の御霊前に御誓い申上げるものであります。

## 加藤玄智先生のこと

本会理事  
國學院大學日本文化研究所長 上田賢治

私が加藤玄智先生に直接お目にかかり得たのは、確かに昭和二十年代の終りに近い頃、当時國學院大學宗教研究室に出入りしていた学生たちが安津素彦教授に引率され、箱根の山居をお訪ねした時、それが最初で、そして唯一の機会であったと思う。宗教学の先達で、特に神道を宗教学の立場から研究し、多くの業績を通じて、近代

社会に神道の持つ意義と役割とを有効に紹介された学者という、極く限られた認識をしか持ち合わせてはいなかった。

先生はその当時、最晩年。瘦身で上品なお顔立ち。がやがやと騒々しい学生たちにも眉根一つしかめられもせず、にこやかな温顔を崩されることも無かった。お話をなさる時はしかし、鋭い眼に光が射すという印象を私は今もなお持ち続けている。どのようなお話を承ったのか、確か神道宗教学会のために役立てようという考えから、重いテープレコーダーを携帯して行った筈なのだ、却ってこの機械のせいに違いない、お話の内容を今、宙に想い出すことは出来ない態たらくである。先生には申訳ないことだと深く恥入っている。

○

私が先生の学問に多少とも立ち入った理解を持ちうるようになったのは、先生による主著の一つ『神道の宗教発達の研究』に取組んだ時である。私が学部時代から宗教学を専攻し、その学問のためにアメリカへ留学の経